

## 第26回「東書教育賞」の審査を終えて



審査委員長

寺崎昌男先生

受賞された先生方、そして関係者の方々に心よりお祝い申し上げます。東書教育賞は毎年200編以上のご応募をいただいております。東京教育研究所の先生方の第1次審査、そして我々審査員の審査を経まして、その結果を本日ご報告することとなりました。本日、お越しになりました先生方、おめでとうございます。おそらく結婚のご経験のある先生でしたら、今日は披露宴に次ぐようなおほめの言葉がたくさん聞かれると思います。私はその皮切りとして、皆さん方の論文を読ませていただいて、その内容の紹介と私自身のコメントをお話したいと思います。

まず小学校の部、最優秀賞を受賞されましたのは、岩手県花巻市立湯口小学校の三浦弘子先生です。おめでとうございます。論文は「食育と家庭科の連携を通し食生活への意欲と実践を育む指導の工夫」です。この論文は岩手県の小学校家庭科教育研究大会において主題になっている、「未来をつくり出す豊かな心と確かな実践力を育む家庭科教育」に基づいて全校挙げて実践をなさった報告です。地域や家庭と連携し、子どもたちもまた自ら進んで行動している様子がよくわかる論文です。

私は、まず実践の時々撮られた写真が素晴らしいと感じました。それが見事に報告の中に生かされていてとても感心しました。それから、食育というのはご承知のように、はやりのテー

マですが、この実践でいちばん心打たれたのは、指導のステップ、実践のステップが子どもたちの活動を中心に組まれているということです。

「気づく」、「わかる」、「生かす」の三つの段階にステップを分けて、子どもたちは「気づく」の中で自分と食べ物との関係や給食を手がかりとした自分と給食との関係に気づき、また「わかる」という段階では、食事というものの重要性をきちんとわかるように指導なさっている。そして「生かす」では、朝食をきちんと食べてこようと思うようになった、あるいは家庭で積極的に手伝いをするようになったといった行動面に、学年に応じてしっかり生かされていることが挙げられます。そして、もう一つ感心したのは、地域の方々の協力を得ていらっしゃる。それから、お一人だけの実践ではなくて、同僚の先生方の重要な協力を得て、お一人だけの作品ではなく、共同作品として共同の実践をご報告なさっている。これが、皆さん異議なくこの実践を最優秀と認められたいちばん大きな理由でした。おめでとうございます。

優秀賞に関しては、兵庫県宝塚市立仁川小学校の野村美由紀先生のご報告を選ばせていただきました。これは特に1年生を対象とした『読書力』を支える『読解力』育成の試み』と題されています。子どもたちの読みたい、知りたい、伝えたいという願いを満たす学習活動を実現する、その具体的な方策を1年生に対して指導さ

れています。子どもたちが一人で本を読むだけでなく、みんなで読む、伝え合うという活動を行いながら、最後は自分のお気に入りの本のおすすめというものを書くようになります。子どもたちは1年間で実に90冊の本を読んだと書かれています。そういう意味で、これは見事な緻密さをもった論文であると思います。

次の優秀賞は、愛知県碧南市立柵尾小学校の校長先生でいらっしゃる金子てる子先生です。金子先生は第17回東書教育賞で優秀賞を受賞されておられまして、今回の受賞は2度目になります。「地域へ働きかける平和教育 ～『二十世紀からの贈り物』～」と題され、学校の史料室から発見された昔の日本軍の落下傘等を手がかりにされて、地域に住んでおられる戦争体験者から、あるいはその家族から、遺族から戦争遺物を収集しておられる。この集まった戦争遺物を教材として、戦争に関する子どもたちの認識を深め、かつ平和への意識を養うというものです。どうかすると戦争に関する教育や平和に関する教育は、歴史教育になり、平和に関する教育はお説教になることが多いのですが、戦争に関するモノを集めて、それをきっかけとして戦争と平和に関する教育を展開なさっているところが、審査委員会の高い評価を得ることができました。

次の優秀賞は、広島県東広島市立河内小学校の木原加代子校長先生の「和文化教育で一人一人に確かな力をつける学校文化の創造」です。和文化教育というのは大変重要で、また、実にユニークな取り上げ方をしておられます。日本の文化教育としての「童謡」を取り入れておられる。一人一人の子どもたちが自分の好きな童謡を選んで、それを身につけた上でみんなの前で一人で歌う、一人で歌唱するという実践です。子どもたちは音楽に関する才能を磨くと同時に、童謡のもっている背景も理解することができる。そして、何よりもみんなの前で堂々と歌うという能力を身につける。つまり、表現活動のところまで子どもたちの育ちをみるという

ことで、非常に力を得たということが書かれています。そうした子どもたちに培われた自信は、同時に学校全体の学力テストに関する得点にもはっきり影響しているということが論文に書かれておられました。私はこの点で一つの切り口として和文化教育で総合的な学習が行われていたのであり、その総合的な学習は学力をも保証するものだとこのことを感じさせていただきました。

小学校の最後は特別賞の茨城県日立市教育研究所長の大地斉先生の論文です。大地先生は校長という教育現場出身の一人の行政マンが書いた文章であると初めに断っておられます。先生は、校長先生ご退職後、県にお勤めになりまして教育研究所長としての仕事を果たされ、茨城県内で初の「こども発達相談センター」の開設にご尽力されました。この開設に至るまでの記録は、教育行政改革の観点からしても注目すべきものだと感心いたしました。これは特別賞がよいということになりました。

次に中学校に移ります。中学校は、熊本県玉名市立有明中学校の井上裕一先生の論文が最優秀賞を受賞されました。井上先生はこれまで実に3度優秀賞を受賞していらっしゃいますが、今回は「追究意欲を高める地域教材の開発と学習活動の工夫」と題し、有明海沿岸の玉名という地域の増産を目的とした国営の干拓事業や事業完成後は畑として利用されていたという事実、さらには耕作放棄地の増加という課題とその再生プランの作成、これらを子どもたちに指導・展開させておられます。

昨年の12月6日、諫早湾の干拓事業の潮受け堤防の締め切りが行われたことについて、福岡高裁が改めて国側の主張を退け開門を命じました。これは、皆さん方、ご承知のとおりだと思いますが、こういう事態が目の前で起きて進行していることを取り上げられて、社会科の教材として取り扱われています。

地域の課題を見直すことは学習指導要領にももちろん書かれていますが、その中で社会科教

育の教材を作り上げていくことは非常に重要です。子どもたちが主体的に学ぶということは、それは課題をもって学ぶということだと思います。あるいは、テーマをもって真理を探求するということだと思います。その点では、井上先生の実践には非常に共感するものがあり、これは中学校1年生対象ですが、中学校の社会科実践として高く評価すべきだろうと思いました。

中学校の部の優秀賞は、まず愛知県一色町立一色中学校の美濃浦恵子先生の論文です。これは実に横断的な保健学習を敢行なさっています。敢行とあえていいますのはなぜかといいますと、担任の先生の妊娠をきっかけに、それを対象として子どもたちに命の大切さを保健の授業として立ち上げていらっしゃいます。子どもたちは妊娠というもののメカニズムを学ぶと同時に、お腹の中の子どもが刻々と成長していくことをいろいろな形で勉強しています。そして、子どもが産まれた後、生徒たちは改めて自分の親に対する感謝と、自分の命はかけがえのないものだということを実感しています。この10カ月の間の刻々としたお腹の中の変化に生徒たちはどういう感想をもったか、このことが丁寧に書かれていまして、この点が審査員の感動を呼びました。

次の優秀賞は、愛知県岡崎市立北中学校の武井翔先生の論文です。これは中学校1年生を対象にした、「確かな表現力の育成を図る英語スピーチ学習の工夫」というものです。小学校で英語活動の必修化が目の前に迫っていますが、中学校英語に関して、ここ数年残念ながら東書教育賞で賞をお与えするというにはいきませんでした。今年の実践は、スピーチに基づきまして生徒たちが自己紹介と他己紹介を、トレーニングを経ながら、話したり、自分に関する事実を示したり、それを英語で語ったりということをして一人だけではなくて、数人の努力によってやりとげています。これはやはり大きな自信を子どもたちに与えていると思いました。

次の優秀賞は、長野県長野市立柳町中学校の

新井仁先生の論文です。「統計資料を取り入れた数学的モデリングの教材開発」です。これについては後ほど坂元先生のほうからICTに関わる論文の総評の中でお話くださると思います。

それから、茨城県つくば市教育委員会の教育長でいらっしゃる柿沼宜夫先生が特別賞を受賞されました。「4C（協働学習・言語力・思考力・学習内容）を育むICT教育」です。こちらにつきましても、後ほど坂元先生の総評の中でお話があります。

最後に私自身の感想を少し申し上げたいと思います。その一つは、去年も申し上げましたが、論文の投稿をされた先生方に対する敬意です。これは欠かすことができません。本当に先生方の努力には我々も敬意を払わざるを得ない、払わないではいけないということがあります。2番目は、いま学力問題を介していろいろと問題になってきているテーマが、世間でもマスコミでも、もちろん政府でも行政機関にもいろいろありますが、全体として先生方の緻密な、学力とは何か、子どもが育つとはどういうことか、これに対する模索が実践の裏側にはっきりあるということです。

「知識基盤社会」という6文字の言葉をお聞きになった方も多いと思います。あらゆる答申の枕詞がいまや知識基盤社会です。しかしよく考えてみると、知識基盤社会というのはどこから出てきたのか。私の調査したところ、1970年代、OECDが当時初めて使い出した言葉です。英語でした。その英語は何となっているか、knowledge-based societyという言葉です。knowledgeという言葉とbasedの間には実は「-」（ハイフン）が入っています。これはknowledge-basedであるsocietyのことです。つまり社会のことです。社会がそのように変わっていくという話です。

ところが日本にそれが入ってきまして、日本語には受身形の言葉がありませんから、英語のように知識に支えられた社会だというニュアンスが消えて「知識基盤社会」という、どこで切

れるのか分からない6文字になった。しかし、私はこの言葉の本当の意味は、新しい社会は、知識というものによって基礎・基盤が支えられた社会、その意味で知識とはどういうものでなければならないか。知識論としてこれを見る時に、初めて教育問題になるのだと思います。

私どもは新しい社会、新しく生まれてくる社会の中でどういう知識が必要なのかという反省に迫られています。そこを探求するのが我々の仕事なのでしょう。その知識は実は子どもという人間主体にとって、あるいは成人にとって、さらに我々のような生涯の最後を迎えつつある老人にとってすら必要なのです。その知識とはどういう知識なのか。頭から言葉を覚え込む知識なのか。あるいは、こういうことだということが分かっただけでいい知識なのか。そういうことが問われていると思います。PISAの学力

調査はまさにそこを問題にしたもので、それより前に行われた世界学力調査とは全く異質の調査でした。私どもはそういう点で、現代において子どもたちにとって必要な知識とはどういう質のものであるか。このことを明確に意識した上で教育に携わっていく必要があると思います。

最後にもう一つ、それは先生方が実践をお書きになることの尊さです。これは外国にはほとんどないことではないかと思えます。学校の先生方が自分の実践を子どもの変化と合わせて文章に書く。これは実に大事なことで、先生方はその伝統の上に立って応募してくださいました。その結果を読むことができた我々は、そういう点で敬意を払うと同時に感謝をいたしております。

本日はおめでとうございます。



皆さん、おめでとうございます。ICT関係の論文は19編ありまして、それを拝見させていただいた結果、本年は優秀賞1編、特別賞1編を選考させていただきました。優秀賞は、中学校の新井仁先生の「統計資料を取り入れた数学的モデリングの教材開発」という素晴らしい論文です。統計の重要性はだれもが知っています。日常生活は統計を基にして動いているし、いろ

いろなことが起こっています。ところが学校で学ぶ統計は、いろいろな資料がありますし、勉強はやってくれますが、自分の日常生活での統計と密着した統計教育にはなっていません。

そこで新井先生は、たまたま自分の車を買換えることで、旧車と新車の燃料費を比較させています。いま使っている車両の燃料費のレシートがある。新しい車にしてからのレシート

の数値をグラフに描くと1次関数になってくる。それを基にして燃料費が10年間使った場合にどのぐらいの差があるかを計算したら13万円。これが多いか少ないか。意外に少ないものだねというような感想がある。しかし、その授業を最初にされたのち、次に、いや、それだけではないんだよ、燃料はCO2排出に影響を与えているんだよということも勉強させています。

先生のレシートのデータを子どもたちは自分で分析し、それから推定値を算出している。電卓を使ったり、手書きで計算したりと、いろいろな数値が出されてきます。そういうものを比較しながら、ある子はまとめた数値が、だいたい2000リットルになった。では、2000リットルはどれくらいかということ、牛乳パック何個分を処理した分だとか、それによって排出されるCO2はプールの5.7杯分であるとか、そのような生きた自分の身近にあるデータを使った統計教育をなさっているということで、生きた生活に基づく統計教育というものが成り立っているのではないかということで優秀賞の受賞となりました。

もう一つは、中学校特別賞の柿沼宜夫先生の論文です。四つのC、ICTのCが、communityのCと、communicationのCと、cognitionのCと、contentのC、それぞれのCについて、ほとんど全部の教科に当たる実例をまとめていただいています。

こうしたコンピュータの使い方に対する教科教育での貢献の仕方が如実に示されています。これはあちこちの教育長さん、あるいは首長さんに対する指針としても大事な意味をもつだろうということで、特別賞を差し上げることにしました。

いつもはここで、この1年間に起こった世界や日本のICT活用の状況をご紹介しますが、時間的に限られていますので、お話しできる範囲のことをご紹介しますいただきたいと思います。

ご案内のように、ITの先進国というのは英

米を中心にした先進国です。インフラがだいたい整い、ハードも、ソフトも、ソリューションも、ツールも、だいたい行き渡ってきた。これからはそれらを上手に活用していく。活用するための教師教育がとても大事だという方向に、世の中は動いているようです。

火をつけたのはブッシュ政権の、落ちこぼれない子どもたちというところでの、新しい人間のこれからの能力はどうあらねばならないかというもので、そのための施策として挙げられたのが、市民リテラシーを大事にする、それからプロフェッショナル・デベロップメントというか、教師の専門力をつける、そしてリーダーシップの強化に革新的な予算をつけるとか、教師教育、eラーニングとか、ネットワークの整備のような方向でのナショナル・エデュケーション・テクノロジー・プランというものを2005年に発表しています。

ところが2010年、オバマ政権になってからもずっと同じ名前です。ナショナル・エデュケーション・テクノロジー・プラン。なぜまた同じ名前なのか、迷ってしまうのではないかという感じですが、ただ、中身が少し変わりました。教育の内容にグッと近づいています。例えば学び、評価、教え、そのためのインフラとか、成果・結果を大事にしてコストと成果との対比的な見方で教育をみようとしています。

きっかけとなったのが、いろいろありますが、コンピテンシーといひまして教師の資質です。資質の中でICTのコンピテンシー、資質能力はどんなものかということが中心にとらえられています。アメリカの教育・芸術系の団体では、そこの学生用が7年で、先生の能力のコンピテンシーが8年、学校経営者の能力が9年という、毎年新しい人間の能力像というか、ICTを使った教育技術の能力像みたいなものを作っています。ヨーロッパでは21世紀のスキルといって、いわゆる有名なKSAVEモデルというのを打ち出しています。Kはknowledge、Sはskill、AVEというのは、Aがattitude、態度、Vが

value、Eがethicsという「知」「情」「意」に当たるものです。「E」のほうは三つの文言のセットになっています。そのような動きが出てきています。

ユネスコに行きましたら、世界でICTを使っている素晴らしい実践を表彰するという事業がありまして、毎年、世界各国四十数カ国から4、50の、年によって違いますが、候補が出てきます。それを審査してユネスコのICT教育事業賞を出します。その表彰式のついでに、ICTを上手に使うための先生の資質能力、ICT・CFTといいます、Competency Framework for Teachersという、そういう世界基準を作ろうということがあります。

ですから、先生の能力の世界基準をユネスコが本腰を入れて作り始めるという時代になってきているわけです。世界がそちらの方向に向いて、どんどん基準を作ってやろうとしている時に日本はどうか。日本は、このままではちょっと大変なことになりそうだという印象があります。

いろいろお話ししたいことがありますが、これからも先生方の素晴らしい能力を、教育の中でICTも活用するという方向で生かしていただくように、皆さん方のご努力、ご支援をいただければうれしく思います。

本日はおめでとうございます。



皆さん、おめでとうございます。私はICT部門の審査をさせていただきましたが、いま坂元先生がご丁寧にご説明されていますので、簡単に申し上げたいと思います。私は自分の大学で学部の1年生を教えています。学部1年生を教えるのは並大抵ではないと思っています。いまの学生は90分の時間ももたない。それでいろいろな工夫をしなければいけない。その一つはやはり教材だと思っています。何とか定番の教材を作りたいと私は日々考えています。

優秀賞受賞の新井仁先生は、いろいろないい教材を作られておられますが、私も似たようなことをやっています。シミュレーション的なものやってみると学生が興味をもってくれるので、だれがやっても、これだったら学生がこちらを向いてくれるという教材を何とか手に入れたいと私は思っています。そういう点で非常に共感しました。これが1点です。

2点目は、私は道具を自然に使いたいという気がしています。道具を使わなくてもできる力量が、正直申し上げて、私にはないのです。90分もちませんので、道具を使う。やはり道具を使えば、なんとかもちます。私の専門は教育工学です。ただし、実際に教えているのは、教育工学を教えているのではなくて、教育方法とか教育基礎論とか、本当の教育学を教えなければいけないわけです。もちろん一生懸命勉強しましたが、例えば教師とは何かというようなこと

を私は90分間しゃべれないのです。ですから、それをどうやって学生をこちらに向かせたらいのかと、いろいろな勉強をしましたから講義はできますが、しかし、学生を動かすことはできません。

そこで私はどうしているか。時間が限られていますので、オリエンテーションの最初にNHKの「プロフェッショナル」ですね。あれはいい映像がいっぱいあります。仕事とはこういうものだというメッセージをまず伝える。その時は、部屋を真っ暗にしますが学生は寝ないです。そして最後に、自分で考えたことを書かせる。このようにITを使っています。

それから、東京書籍のいろいろな教材を使っています。学生に使わせるのではなくて、見せるのです。見せて「どうだ」というだけで学生から反応があります。すごくinteractiveな授業ができます。だから、道具というものを私たちはごく自然に使いたい。それで効果があれば普及していきます。効果がないものは普及しない。当たり前のことだと思っています。

3点目は、我々はいかにそういうものを伝えていくかという工夫ばかりをやっていたのでは駄目だということです。最後はどうやって知識を出していくか。どうやって知識を作り出していくかということです。学生はそれぞれ、これはたぶん小学生も同じだと思いますが、一人一人の子どもは何かそれなりの知識をもっています。我々にはないものをもっています。それをどうやって引き出したらいいか、どうやって表現させたらいいかというところがポイントではないかと思います。

特別賞の柿沼宜夫先生のつくば市はまさに道具をどのように自然に使うか、子どもに道具を使ってどのように表現させるかということをごく自然にやっておられます。今回は特別賞ということですが、このICT部門ではどのように普及していくかということを検討する必要があると思っています。そういう点で今回はいい受賞をしていただいたと思っていますので、お礼

を申し上げたいと思います。

おめでとうございます。

#### 審査委員の講評・所感



鳥飼玖美子先生

受賞されました先生方、本当におめでとうございます。投稿された論文を読ませていただきまして、これは毎年のことではありますが、先ほど敬意を表するという言葉が審査委員長からも出ましたが、私もまったく同じ感想を抱きました。最近の学校現場は様々な問題を抱え、信じがたいほどの仕事量、忙しさです。その中で子どもたちに向き合わなければいけないという厳しい現実の中で、ここまで論文を書かれたこと、これ自体が想像を絶するようなご努力だったろうと思います。

実践を踏まえた論文は空理空論では済まないもので、実際に試みて、それを踏まえて書く。最近の外国語教育分野では、reflection、振り返りということを強調しています。つまり、教える者が自らの行っていることを振り返り、そこからまた新たに進んでいく。これが教育であり、これは外国語教育だけではないと思います。先生方がなさっているのは、まさしくそういうことです。文字にしてご自分のなさった実践を書くことは、すなわちご自分のなさっていることを振り返ること、そしてそれが凝縮されているからこそ、読んだ時に感銘を受け、敬意を新たにするとということだと思います。

テーマも様々にわたっています。平和という難しい問題を実に身近なところから掘り起こし、歴史と結びつけながら、生徒たちの心に響くような形で実践なさっているもの、あるいは、日本文化を踏まえたものや読むということに力点を置いたもの。私の苦手な理系についても、こういう切り口だと私ももしかしたら、ついていけたかなというような、様々な力作がありました。

その中で私の専門としている英語に限って見ると、4月から小学校の英語活動必修化を控えて初めて複数の取り組みが出され、今回、表彰されたことは私にとっても大きな喜びです。力作を読ませていただきながら、私は現場の先生方に対して、特に小学校の英語の場合には様々なひずみとか、条件整備が整っていない、その解決がみられない中で全てを現場の先生方に押しつけているという言葉が悪いのですが、結果的にそうなってしまっていると思います。その中で現場の先生方がどのようにしたらいいのかと悩み、あがき、苦しんでおられる。自分のできる範囲で子どもたちに何ができるかということ、日々問題に直面しながら、厳しい環境の中で解決策を模索しておられる。この姿に打たれると同時に、やはり行政が現場を突き放すのではなく、あるいは丸投げをするのではなく、責任をもって作り上げていかなければいけない部分が多いということを改めて痛感しました。

小学校から中学校にどのように結びつけるかという接続の問題は、現場の一教師があがいてもどうしようもない部分があるわけです。しかし、小学校の英語活動で5年生、6年生の貴重な時間を使うというのは、中学校への接続を抜きにしては考えられないことで、ここをどうするかというのは、英語教育界だけではなく、教育界全体、そして行政全体がもっと真剣に向き合って考え、現場で努力なさっている先生方を後押ししなければいけない、支援しなければいけないというふうに改めて感じました。そうい

う意味では敬意をもたせていただくだけではなく、新たな覚悟をいろいろな意味で社会に問にかけている。そういう貴重な貢献も先生方はなさっていると思います。そのようないろいろな意味を込めて、今日はおめでとうございますという言葉とともに、ありがとうございましたというふうに申し上げたいと思います。



皆様、おめでとうございます。私は坂元先生や赤堀先生と一緒にICT関係のほうを読ませていただきました。坂元先生からお話がありましたように、日本のこれからは大丈夫かなということがいろいろあります。今は、デジタル教科書ということで、また大変なご苦勞をされている時期ではないかと思ったり、これから教育界もいったいどういうことになっていくのか、いろいろ心配があるのではないかと思います。

そういう中で今日、こちらで受賞されたICT関係の二つの論文は、それに向けての一つの解決の道を示してくださっているのだろうと思います。

中学校特別賞の柿沼宜夫先生の論文に四つのCがありましたが、市というところがビジョンを示して、そして教育委員会がしっかりと学校を支えていくという仕組みを整えられ、広め、しかも長く継続されていってほしい。柿沼

先生は中学校の教員をされていらっしゃいました。当時、つくば市ではなくて、桜村の教育委員会の下での桜村立桜中学校の教員として、最初に中学校でコンピュータを使った発表会をなさった方もいらっしゃいます。それ以降ずっとこの仕事を継続されていて、今日は教育長として、こちらにもご投稿いただいたということです。その継続のこととか、ビジョンをもってずっとやってこられていることが今後の市町村にとっては必要なことで、それがうまくいく可能性があるということを示してくださったという点で大変参考になりました。

また、優秀賞の新井仁先生の論文については、教科のニーズからICTを使うといいということを示してくださっていると思います。実際の学校で子どもを生かす、子どもが生きていく、子どもが育つためにICTがうまく使われるという、そういう本質を突いた取り組みを示してくださっているのではないかと思います。

しかし、残念ながら今の日本で欠けているのは、おそらく教員養成課程での指導ではないかと思えます。先程、坂元先生からのユネスコのお話にもありましたようにICTの世界基準等々もありますが、日本では残念ながらまだそうしたところが不十分ということだろうと思えます。日本は国というレベルでの行政的ビジョンをもって、総合的に打つべき対策をきちんととることが、ICTに関してはどうもできてこなかったのではないかと思います。

しかし、日本の中には優れた実践や取り組み、今後模範とすべきものはいろいろあります。海外の事例も参考にしつつ、日本でもいい実践をベースに、どう取り組んでいったらよいかという柱を端的に示してくださったものが賞を受賞されたわけです。そういう意味で私も一緒に喜び、さらにこれから先、一緒に頑張っていきたいと思えます。

#### 審査委員の講評・所感



三上裕三先生

栄えある第26回東書教育賞を受賞されました皆様に、心よりお祝い申し上げます。

まず小学校の部で最優秀賞を受賞されました岩手県花巻市立湯口小学校三浦弘子先生、おめでとうございます。「食育と家庭科の連携を通し食生活への意欲と実践を育む指導の工夫」と題するテーマで、全学年を通して実践されたものです。平成17年食育基本法が制定され、そこでは「食育は子どもが生きる上での基本であって、知育、徳育、体育の基礎として位置づける」と、学校における食育の推進が極めて重要視されています。子どもの食生活に関する問題が指摘される中で、三浦先生の研究は、家庭科を中心として低学年の学級活動や生活科あるいは総合的な学習等他教科領域との関連を図りながら、児童の実態に即した実践的な研究をまとめられたものです。全学級で実践され、児童が食べ物や人との関わりを体験的に学習する内容となっています。実践では体感を伴った体験活動が大切にされ、児童は学校で学んだことを家庭生活の中で手伝いや調理などに生かそうとする意欲的な姿がみられます。地域の保育園や幼稚園との連携協力も図り、学校を核として家庭や地域にも広がりが見られ、大きな研究成果が上げられたものと高い評価がなされました。

次に中学校の部で最優秀賞を受賞された熊本県玉名市立有明中学校井上裕一先生は、今年の優秀賞に続く受賞で誠にありがとうございます。

井上先生は昨年度小学校から中学校に異動され、今回は中学校1年生を対象に、研究テーマ「追究意欲を高める地域教材の開発と学習活動の工夫」を掲げ、研究論文をまとめられました。生徒の身近な所から教材をみつけ出し、生徒が課題を解決するために意欲的に追究する学習を通して、地域に対する愛着を育て社会への参画態度を育てることを意図して研究を進められました。今回は、玉名市に残された古い干拓の施設に着目し、干拓が行われた歴史を調べる中で、当初米の増産を目指したはずの干拓なのに完成直後は畑作に転じたのはなぜか、また現在は米の生産調整が行われる中で畑作よりも米作りが広がっていることに疑問をもち、生徒が主体的に課題を追及する姿がよく分かる内容となっています。

先生は、絶えず生徒が課題意識をもって学習を追究していく授業実践を目指しておられます。身近な地域から教材を開発するために何か適切な素材はないだろうかと常に地域を巡り、地域の人々との人間的な触れ合いを大事にされていることがうかがわれます。今後更なる研究の深化を期待しております。

優秀賞を受賞されました小学校の野村美由紀先生、金子てる子先生、木原加代子先生、そして中学校の美濃浦恵子先生、武井翔先生、新井仁先生、特別賞の大地斉先生、柿沼宜夫先生、おめでとうございます。先生方それぞれに学校や子どもの実態に即した現実的な課題を取り上げて研究論文としてまとめられたもので、優秀賞や特別賞に相応しい優れた研究実践であることはいうまでもありませんが、ここでは学校経営の領域で受賞された東広島市立河内小学校の木原校長先生が中心となって実践されました「和文化教育で一人一人に確かな力をつける学校文化の創造」について簡単に述べさせていただきます。

先生の学校は全児童81名という小規模校です。一般に、小規模校の子どもは、人前で話せない、発言に自信がもてないなど、消極的で自

己表現力に劣る傾向があることが指摘されます。そこで、木原校長先生は、まずは「礼に始まり礼に終わる」という学習の構えを徹底させ、日本人の心のふるさとともいえる昔から歌い継いできた唱歌・童謡に目をつけ、全校児童に一人一曲持ち歌を決めさせ、みんなの前で自信をもって歌えるように指導されました。外部からみえたお客様の前で堂々と歌う児童の写真が地方新聞にも載っています。研究の成果として学校と家庭・地域との絆がいつそう深まり、子どもは挨拶がよくできるようになり、敬語が使えるようになったこと、全国学力調査等にも学力向上がみられるなど、身近なところからの実践の積み重ねが大きな成果を上げていることが報告されています。校長先生を中心に、全校の職員が同じ方針で地道な指導の積み重ねが実を結び花開かせる教育実践であることを証明していると思います。

いよいよ4月から、小学校においては新教育課程の全面実施、中学校においては移行期2年目を迎えます。研究実践のヒントは意外と身近な所にあることにも思いを寄せて、更なる地道な教育活動が行われることを期待しまして感想といたします。